

ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第59号 (2011年4月)

風に吹かれて (38)

白井啓治

『ふる里とは物語の降る里』

この言葉は、当「ふるさと風の会」とその兄妹グループ「朗読舞劇団・ことば座」を案内するときにしばしば用いている言葉である。

ここに言う「物語」とは、人の暮らしにおける「知恵と夢」と理解してもらえたらいいであろう。暮らしの知恵というのは積み上げられてきた歴史といえ、その地の固有の統計学的判断基準といえる。そして夢とは統計学的判断基準では構築できない想定外の創造のことで、それは仮説設定と置き換えてもいいだろう。このように「ふるさと」とは、その地の固有の統計としてのデータを有し、そのデータを基にしてデータでは想定しえない仮説としての夢の創造が常に降っている里(郷)のことを言うのである。

小生の主張するこの「降る里」と同じような定義をしている「ふるさと」に、「古里」と表記するふる里がある。この古里は、十世代にわたって人の口に伝えられるものを持つ里、のことを言うのだそうである。十世代にわたって口伝するものは、その地に暮らしうえて重要な判断基準という事が出来、いわゆる暮らしの知恵である。

ふる里をどう定義し、考えるかは色々な意見があるだろう。しかし、すべての定義において不可欠なものとは、その地に暮らしに必要な統計学的判断基準であろう。その地に長く暮らしを創るためにはその地固有の暮らしのための判断基準が当然なくてはならない。それが歴史の持つ文化的に重要な部分でもある。だから暮らしの歴史は大切にしようと言われるのである。

当会報は、今回で59号となった。来月はいよいよ60号に達する。満5歳である。ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える、を目標にどこからの援助も求めることなく、独立独歩で自分たちの思いや考えを述べてきた。月一回発行の会報であるが、これがなかなか大変である。だが会員の人達は、誰一人休むことなく毎月必ず原稿を書いてくる。実に只者ではない連中と言える。

会報がふる里に降る物語になっているかどうかは別にして、5年間という歩みを続けてくると、応援やお叱りの言葉を頂けるようになってくる。それがまた会員のやる気が刺激され、一寸だけ声を張り上げ、自分を主張してみる。これは矢張り一人一人の声が物語になってきている、という事なのだろう。

東北関東大震災被災地及び 被災者の方々へのお見舞い申し上げます

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。会費は月額2,000円。

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063 打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

さて、3月11日に発生した大震災によって大変な被害が発生し、日本国内ばかりでなく世界中に大きな混乱を呼んでいる。こうした時に重要なことは、混乱を煽るような、興味本位な情報の発信ではなく、加工の可能な情報を発信することである。情報というのは、物語(問題解決と将来設計という意味を含めた物語)を創造するための資料になるものでなければならぬのであるが、報道メディアを含め混乱による風評を煽ることにしか意味をなさない情報が殆どであった。

そのような中で、当風の会&ことば座のHPにお力を貸して頂いている木村進さんの「まほらにふく風に乗って」のブログに書かれた情報は、大げさなものではないが、情報の持たねばならない加工の自在性を確りと有した情報であった。

自分たちに関係のある人だから良く言うという姑息な感覚は小生にはないので、言葉のそのままに捉えていただければと思う。普段は、石岡市を中心とした周辺地域の歴史散歩のようなブログを書かれているのであるが、この一か月は、貴重な災害情報を流しておられた。

情報化社会と言われ、各メディアを通じて情報と称して無数に近く発信されているが、その中で本当に情報と言えるものは、実に少ないものである。それこそ石岡市のHPの災害情報なんてお粗末なんてものではない。木村さんのブログに何度となく、当ブログは石岡市公設のものではありません、と但し書きがされていた。勘違いしてあくセスしてきた人が多かったのであろが、それだけ公設の情報が情報になつていなかったと言える。

市議選挙が始まることもあって、下らぬ電話が入って来るが、議員になろうという者達は、もう少し、いやもつともっと勉強してもらいたいものである。そして物語になるシナリオを確りと書けるようになってから立候補してもらいたいものである。

議員報酬を現在の三分の一にして、議会は仕事後の午後六時からとする。当然〇〇手当たとか議員年金なんてものもなし。このようにしたら、いや成ったら、かな。そうしたら果たして今立候補しようとしている人の何人が立候補をとりやめるのであろうか。

いばらき・ばらき

鈴木 健

奈良時代の国郡制の施行によって常陸国茨城郡が成立したが、それ以前に、「茨木国」(古事記、「茨城国」(日本書紀・常陸国風土記、があった。茨木と書かれたり、意味の異なる茨城になったりするということは、それらが当て字であることを示している。七二三年に出されたいわゆる風土記撰上令に、「山川原野ノ名号ノ由ル所(※自然地名の由来)、又、古老ノ相伝ウル旧聞異事(※伝承)」を報告せよ、とあることを受けて、常陸国風土記の編述者はつぎのように二つの地名由来を載せている。

「古老のいへらく、昔、黒坂命が穴に茨を入れ、反抗する土蜘蛛(縄文系在住民)をそこに追い込み、皆殺しにしたので、その茨を県の名につけた。

「あるひとといへらく、黒坂命が縄文系在住民を打ち滅ぼそうと茨をもつて城造ったので、その地の名を茨城という。

前者は茨木の、後者は茨城の由来、ということであろう。この類は風土記的地名起源説話と言われているが、説話としたほうがより正確である。

どちらも、当て字に見合うかたちで創作したストーリーであり、「皇軍(天皇の軍隊)」が土蜘蛛(縄文系在住民)を葛の網を張って襲撃したので、その村を葛城(カツラキ)と名づけたという日本書紀神武天皇の記事がモデルになっている。

このように常陸国風土記には、茨城(木)という漢字やそれをもとにした地名の意味の詮索だけがあつた。しかし、茨城(木)が当て字であるとすれば、その文字を宛てたものと言葉と、その言葉の語源を調べたくなる。

奈良時代の古事記・日本書紀・常陸風土記には

頻繁に茨城という国・郡名が表れるが、その読みを示すものはない。しかし、茨は棘や荊とも書かれ、奈良時代にウバラとかウマラと読まれ、あるいは呼ばれていた。その類推から、これら諸本の近・現代版では茨城にウバラキという読みをつけしてきた。そして今、石岡市茨城はバラキと呼ばれている。そうしたなかで、唯一、茨城の読みを明示したのが、源順編の『和名抄』である。同書の完成は九三四年ごろであるが、奈良・平安時代の日本語百科辞典ともいふべきものだ。その国郡名に「常陸国 国府在茨城郡」「茨城(※郡) 牟波良岐 国府」「茨城郡茨城(※郷)」「那珂郡茨城(※郷)」とみえる。このことから、茨城はいわゆる万葉カナで「牟波良岐」と書かれていたことがわかるが、ではその牟波良岐の発音は、ということになる。

普通に読めばムハラキである。外国の発音になれてきた現代人でもエジプトのムバラクの発音にはなじめない。ムハラキに至っては一層の違和感を持つ。しかも言葉の意味もまったく見当がつかない。かくて、折角の貴重な情報はすべての学者たちによって邪魔者になり無視されてしまったのである。茨城をどう読みどう解釈するかということに終始している限りムハラキは厄介ものに過ぎない。発想を転換して、「その尊むところはひとえにその辞(ことば)にありて」、「文字にあらざ」(1月号の原則に立ち帰るならば、茨城という文字の読みと意味が問題なのではなく、なんという言葉に茨城という文字をあてたかが問題になる。ムハラキ、この不自然な発音、不可解な言葉は茨城の読みではない。これこそ、茨城という文字をあてがった元の言葉を発見するキーワードであった。では、和名抄では「牟波良岐」をどのような発音

にあてていたのであろうか。

「良岐」がラキであることは当然として、問題は「牟波」である。その読み方を知るには同書でほかの郡郷名につけられている読みカナを調べればよい。同書ではンの発音を、一般にムと読む牟・無・无などで表している。越後国蒲原(カンバラ)郡は加牟波良、出雲国神門(カンド)郡は加無止、阿波国忌部(インベ)郷は伊無倍、丹波国川人(カハ・ンド)郷は加波無止。これらの牟・無の発音はンであり、後続音を濁音化する。一方、美作国大庭郡は於保無波、上総国稲庭郷は伊奈無波、伊勢国建部郷は太介無倍。これらを「古代地名語源辞典」(橋原佑介他・東京堂)などでは無神経に、オホムハ、イナムハ、タケムへとするが、そのようなごちない発音がまかり通っていたはずはない。これらはオオバ、イナバ、タケベで、無はそれ自体の発音は退化し、後続音を濁音化する記号となっている。そこで、「古代地名語源辞典」がムハラキとする牟波良岐は加牟波良同様のンバラキか、於保無波、伊奈無波に準じてオバラキかということになる。

そのンバラキのンについてであるが、アイヌ語には濁音はないし、縄文系在住民は濁音の発音が苦手だったように見える。しかし、濁音可能音が鼻音に続く場合は、自然に楽に濁音の発音ができる。そのようなことから、濁音化に際して、クンギ・マンズ・マンドなどと鼻音を先行させる東北言葉の習慣ができ上がったのではなからうか。さらに、茨城県北部などではブンギ(分岐)、ディメンジョン(ディメンション)など、濁音可能音の前に鼻音があると、無意識のうちに濁音化する癖が今でも残っている。そういうことで、茨城の

祖先たちは自分たちの土地バラキをンバラキと発音していた。それを聞いた知識人が忠実に万葉カナで書き表したのが牟波良岐ではなかったかと考える。さらに、このンバラキは、語頭に濁音の立つことのない古代日本語時代の発音にも合致していた。やがて、語頭濁音を持つ漢語が氾濫するようになって、本来どおりのバラキと発音するようになったのかもしれない。ウマイは無意識のうちにンマイと言っている。カナシブ↓カナシム、サビシ↓サミシ、ケブリ↓ケムリ、タハブレ↓タハムレ等↓の転はごく普通に見られる。かくて、ンバラキはウバラキ、ウマラキに転化した。後世になると、ウバラ・ウマラはイバラに変わった。室町時代の「易林節用」は「荊イバラ」、同時代末期の「詩学大成抄」は「イバラ」、室町末期とも江戸初期ともいわれる「和漢通用」では「棘イバラ」となっている。同様に茨もイバラと読まれたと考えられ、茨城もイバラキとなったと思われる。

このような過程を逆に遡れば波良岐に行き着くが、その波良岐とはなにか。結論から言うと、それは「開(ハラキ)」であり、林野を払い開いて原とすること/したところ、ということである。『日本書紀継体天皇元年三月』に、「是を天国排開広庭尊(あめのくににおしはらきひろにはのみこと)とす。開、これをば波羅企(ハラキ)といふ」とある。その開だ。天国排開広庭とは天下を開拓して広大な耕地を造成するという意味であろう。波良岐はこの波羅企と同じ発音、同じ意味であったのである。その開が、古代にはヒラキではなくハラキだったのはなぜか。ハラキの語源はなにか。

日本人は縄文系在住民と渡来系支配層との混血によって成り立っている。日本語も同じパターンで、

縄文語に渡来系の言語が合流した構造になっている。一方、アイヌは縄文人の直系の子孫であり、アイヌ語もそれに連動していると思われる。したがって、アイヌ語はほぼ縄文語に遡ることになる。日本語でありながらその語源が日本語では解明できないのにアイヌ語でそれが解説できる語彙が多いのはそのことに起因している。そこで、日本語でわからないハラキの語源であるが、アイヌ語では、

パラ [para] 広 (pa 川下 - ra 低く広い) Ⅱ 原、沖積平地。

バラキ [paraki] 広くしたところ (para 広い - Ⅱ する (現在・過去同形であるから、するⅡした - Ⅱ ところ・こと) Ⅱ 開墾地、開墾。 となる。

ただし、アイヌ語には para, ki, i という個別の語彙はあるが paraki という成語はない。それは自然に依拠した生活を続けているので、開墾や水田開発などには無縁だからである。しかも、日・ア間に交流・交易のなかった日本書紀の時代、それが日本語に流入することはありえない。とすれば、paraki は縄文語ということになる。しかし、縄文人はアイヌと同じく、あるいはそれ以上に自然破壊の paraki とは無縁であったはず。となれば、それは渡来系支配層に服従してそのオオミタカラとされ、開墾に使役させられた縄文人の末裔たちが造った言葉であったろう。しかも、開がヒラキではなくハラキ(波羅企)であるということも、paraki に由来する証しとなる。そして、古代日本語では半濁音(バ行音)は原則として濁音(バ行音)・清音(ハ行音)に変っていたのである。現代では波はハ、婆はバと読むが、当時は波も婆もともにハともバとも発音した。したがっ

て、波良岐・波羅企はハラキでもバラキでもあったのである。しかも、牟波良岐は波良岐のより厳密な発音であったから、これら三者はともに開のことであった。「茨城 牟波良岐」は開墾地につけられた地名であった。

『常陸国風土記行方郡』には、継体天皇の時代(五〇〇年代前半)「郡より西の谷の葦原を截(キリハラ)ひ、墾闢(ヒラ)きて新(アラタ)に田に治(ハ)りき」とある。このように「葦原を截(キリハラ)ひ、墾闢(ヒラ)き」することが「開(ハラキ)」。したところが「茨城(ハラキ)」で、「新(アラタ)に田に治(ハ)ったところが「新治(ニヒハリ)」と言われた。このような開墾は各地で行われたので、茨城という地名がいくつあっても不思議ではない。和名抄には前記の常陸国那珂郡茨城郷(現・笠間市小原)、常陸国茨城郡茨城郷(現・石岡市茨城)のほか、下総国匝瑳郡茨城郷(現・千葉県多古町、芝山町)伊豆国田方郡茨城郷(現・静岡県伊豆の国市原木)が見える。那珂郡茨城郷については七二年の『常陸国風土記那賀郡』にも「茨城の里」と出ている。本誌1月号で取り上げた『石岡の地名』(石岡市教育委員会)を再度引用して恐縮だが、そこには「常陸国風土記の「那賀郡の条」に見える茨城の里も**編集上の瑕疵**として本地(※石岡市内の茨城の地)を指していると考え、したがって「晡時臥の山」は竜神山に、片岡は八郷町片岡の地に比定する。」とある。しかし、さらに二〇〇年以上も過ぎた『和名抄』(九三四年)にも「那珂郡茨城郷」と明記されているそれを、風土記の「編集上の瑕疵(カシ・過失)」としてしまうのは問題である。偏狭な石岡中心主義に浸っていると、まわりから取り残されるおそれもあるのではなからうか。

始めに言葉があった。その言葉でバラキと名づけられた。文字が入ってその言葉を文字で表すことになった。さまざま当て字が考えられたかもしれない。統一国家の建設は中国を模倣して行われた。その一貫として地名も「洛陽」「長安」など好字二字を使用する中国に範をとることとなった。風土記撰上令も、「郡郷の名は好き字をつけ」よと指示した。それを受けて、「開」という一字や「波良岐」の三字ではなく、「茨城」という好二字が使われた。その結果意味がわからなくなり、茨の城のこじつけ説がまかり通ることになったのである。権威者といわれている人の言葉を借りて自説を補強することは、私の好みではないが、最後にあってそれにそむく。柳田国男は、「強いて物々しく漢字を宛てると、そのために後の人が異なる読み方・解き方をして、いつそう命名の本意を辿りがたくする例は、すでに奈良朝のおおむかしの、国郡郷里二字の佳名があ」(地名の研究)と語った。「茨城」はまさにその典型というべきであろう。

果てしなき夢

菅原茂美

どうもこの頃は、寝つきが悪く、うつらうつら、夢ばかり見ている。夢は現実からの逃避か？未来への希望か？

私の見る夢は、どうやら空想的な願望の傾向が強い。日頃は近寄る事さえできない「高根の花」と、しばしの逢瀬に、胸をときめかせたり、空中を遊泳したり、日頃歯の立たぬ強豪に碁で勝ったりと、ほんとに、オメデタもいところ。目覚め

て現実とのギャップに呆れかえる。そして、たまには恐怖のドン底や、泣いて悔しがるような夢も見るが、悪い夢は、獏がすっかり食べてくれるから……と信じているので、悪夢に悩むことはない。ノホホンの超楽天家。能天気もいところ。

【獏】ウマ目バク科の哺乳類。ゾウと同じ構造の鼻を持ち、サイに近縁の原始的奇蹄類。中南米に3種とマレーバクの4種。夜行性で水辺の草や果実などを食べる。体長1.5〜2.5mで、単独で暮らす。古来中国で、想像上の「獏」という動物は、人間の悪夢を食べてくれると信じられている。

春愁や 獏に喰われし 夢の縁 朝吹英和
この句は、今朝見た夢の輪郭がどうもあやふや。きつと獏がきて夢の端っこを齧っていったに違いない……。との解説。 11年2月21日・読売新聞】

さて皆さん、夢を求めて、しばしの旅に出てみませんか。浮世の雑事は、大きな風呂敷に全部包みこんで、押入れの奥に蹴り込み、サツサと、出かけましょうよ！ 政治も経済もみんな呆れ果て、もうどうにでもなれ！ 世界至る所、独裁政治がヒビ割れ、中東に端を発し、世界に広がるとうしている。将軍・大佐・一平卒などが、世上を賑わし過ぎる。中国など革命で勝ち取った政権が、今や庶民の「再革命」を恐れ、戦々恐々。弾丸よりインターネットが怖いらしい。

国内は、政治も経済も、自分さえよければそれでよい。社会道義など、どこ吹く風。インモラルも甚だしい。日頃の仕事も生活も、さっぱり明るくなりそうもない。ならば、そんなものは全部捨てつつまって、さつさと旅に出ましょうよ！

出かける先？ それは京都でもハワイでも花の都バリでもない。どうせこの地球上は、いずこも

同じ。人間の脳味噌が考えたスケールなのだから知れたもの。万里の長城もピラミッドも、マチュピチュも似たりよったり。所詮、人間の本性丸出しの「縄張り根性・権力への妄執」。こんな共通項では、どこへいっても見るものなし。

ならば、人類が築いた、たかが一万年やそこらのこんなチャチな文明ではなく、宇宙のどこかの星の、一千万年ぐらいの歴史を誇る雄大な文明を訪ねてみたい。地球上の人間が持つ、「欲望」や「権力争い」など、ミミッチイ低次元の領域を超越し、キチンと倫理観で貫かれた高次元の世界。きつと、いずこかの星には存在するはず。孫悟空殿、その「筋斗雲」をチョイト貸して下さい！

先月号でも書いたが、NASAの発表によれば、現在、わが太陽系以外の恒星を回る惑星（系外惑星）は、1235個も発見されている。そのうち、主星と惑星との距離や質量などの関係で、水が液体の状態ならば、生命が存在しうるわけで、そのような星は、既に45個も見つかっているという。生命存在可能の惑星の発見は、これからまだまだ増えると思う（理論的には、我が天の川銀河だけでも、1千万個はあるはずと言われる）。

ということは、誕生が、地球より若い星もあれば、遙かに古い星もある。当然、古い星の中には、地球より、1千万年ぐらいいは文明が先行し、知的なエイリアン（宇宙人）が存在してもおかしくない星もあるはず。高度に進んだ文明を持つ惑星は、きつと、いずこかに存在するはず。

さてそうになると、エイリアンはどんな姿・形をしていることやら……。どんな文明を築いていることやら……。地球上の物理・化学の諸法則は通用するの？ どんな元素で生物の体は構成されて

いるのか？ 地球の生命と同じ新陳代謝や繁殖をするのか？ 生物界は、どのように構成されているのか？ 進化の速度は？ 進化の方式は、遺伝子の変化なのか？ 遺伝子はDNAなのか？ 個体の寿命は？ 成長速度は？ 性別は？ 移動方法は？ 地球上の生物みたいに、「自分さえよければそれでよい」とする、妄執は、どのようにして克服したのか？ 無節操な過剰繁殖は、どのようにして抑えたのか？ 妄想は続く。

考えてみれば、いくら別世界といえども、この宇宙は137億年前のビッグバンで全ては、開關した。膨張宇宙や元素の存在比などがその証拠。多少の変化はあっても、およそ均質であるはず。となれば、そんなに驚天動地のサプライズはあるはずがない。万有引力の法則やアインシュタインの方程式が、適応しないはずはない。生き物が共存共栄で暮らしている惑星があったとしたら、彼等がこの地球を見た時、強い生き物が弱い生き物を殺して食べ、栄養にしているなど、信じられない驚異かも知れない。まあ、この程度の異文明なら、有り得るとして心に留め、探検にかけよう。

さて、こちらから、いくら疑問を投げかけても、相手は簡単には答えてくれない。知りたければ、電脳案内という方法で、レクチャーしてやるよ！と、エイリアンから私の脳波に応諾のコンタクトがあり、喜び勇んで宇宙探検に出かけた。

そこで、系外惑星に飛び立つ前、手始めに、まずは地球の兄弟星「金星」を訪ねてみよう。

金星は、宵の明星・明けの明星とも呼ばれ、夕方・明け方にそれぞれ3時間ぐらい輝いて見え、太陽と月を除いて、天空で一番明るい星である。金星は、古代バビロニアでは「イシタル」と名

づけ、愛と美の女神とされている。

金星は地球を1とした場合、赤道半径0.95、体積0.85、質量0.815、重力は0.91なので、地球に非常に似ている。ところが公転日数（1年）は224日に対し、なんと自転の長さが、243日である。つまり1年より1日の方が長い。また、金星は他の太陽系の惑星達と異なり、公転方向と自転の方向が逆であり、太陽は西から上り東に沈む。更に金星の地表温度は470℃で、気圧は90気圧、大気はCO₂が95%もあり、温室効果が甚だしく、水は殆ど蒸発して存在しない。雲は殆ど硫酸である。

兄弟星といわれるすぐ隣の系内惑星でさえ、地球の常識とこんなにも違う。すぐお隣りでありながら地球とは、想像もつかないほどの相違がある。

さて、訪問先の、ある系外惑星（X星）の長老エイリアンに聞いてみたら、こういう話だ。

まず生物の「性別」は、地球では、雄と雌の2種のみであるが、なんとX星では、4種類なのだそう。①雄と②雌の他に、③中性があり、さらに地球の植物などに見られる雌雄同株の、いわば自家受精が可能な④完性（私の造語）というものがある。それぞれにその役割があり、進化の歯車を潤滑に回転させている。この4種があれば、生物の進化も実にスムーズに進み、環境に応じ、この4種が自由に交換できる。地球のように異性獲得のための、激しいバトル合戦もない。無駄なエネルギーの浪費もない。そして過剰繁殖による資源の浪費もなく、適正ポピュレーション（人口）を維持できる。何と言っても生物の闘争本能の根源は、同種の個体数が多すぎるからだ。

次に聞いてみたのは「エネルギーの源」。環境を

汚さず、資源を枯渇させず、再生可能なエネルギーを何に求めているのか？…それは、常温での「核融合反応」による。ノウハウを獲得するのに、結構時間はかかったが、機械はコンパクトに纏め、鶏の卵くらいの大きさで、人間一人の移動に要するエネルギーは、十分に発生できる。人口が多くなるので、大量輸送の「箱モノ」など考える必要はない。ただ母星を飛び立ち、宇宙の環境調査など、長距離移動する時には、かなり大型の「核融合炉」を必要とする。

宇宙空間を移動する時には、光速にかなり近いスピードで往復する。その際、宇宙空間に散在する隕石や塵埃など危険物は、反物質（反粒子）からなる物質で、普通の物質と衝突すれば、一瞬にして崩壊し、エネルギーを放散して消滅する）を放出して、消散させ、安全に運航ができる。

更に「通信方法」について聞いてみた。この辺が、地球文明とは大きく異なるところで、通常の電波は、各恒星のフレアなどにより、電波障害があるので使用しない。それに、もしこの宇宙に、敵対行動を取る文明があった場合、自分の存在を明かす電波を発射するような愚行はしない。現にNASAは、この地球上に、宇宙からの人工的な電波など一切傍受していないと発表している。

では彼等は何を「通信手段」としているのか？それは、素粒子の一つ「ニュートリノ（中世微子）」の利用である。この微粒子は、全ての物質を通過する。あなたの体も地球も素通りする。1987年に起きた超新星爆発によるニュートリノを、岐阜県にある地下観測施設「カミオカンデ」で捉え、02年、小柴昌俊博士がノーベル物理学賞を受賞した。この微粒子を人工的に操って、X星のエイ

リアンは、互いの意思疎通の通信網として使っている。エイリアンの大脳で意思を加工してニュートリノに乗せ、あらゆる物質を通過して、意思伝達したい相手に発射する。相手は、ニュートリノが、自分の大脳を通過するとき、その情報をキャッチして、相手の意思を受け取る。こんな技術が開発されたのは、何万年も前の話だと長老のエイリアンは話していた。そして恐ろしいことだが、彼等は地球上の人間が何を考えているかなど脳波回路に侵入し、天空から全て読みとっている。私との会話は、言葉も文字も一切要らない。私が何を考えているか、全て脳波回路を解析し、瞬間的に読み取り、私の脳波に返事が戻ってくる。X星のエイリアンは、文明が1千万年も遅れている地球人の脳味噌など、全て解析済み。たとえ100億人いようが、すべて読み切れる。聞くところによると、エイリアンも、羽生善治名人（将棋）と井山裕太名人（囲碁）の大脳回路には、ちよつと興味を示したと話していた。

さて彼等は、一体どんな「姿・形」をしているのだろうか？ 極度に文明が進化しているのだから、巨大な神経回路は持っているだろう。もしかして、神経細胞の塊を膜で囲み、外壁は骨などで保護しているだけか？ まるでサッカーボールにおまけみたいな手と足でも生えているだけ？ しかし、これだけではあまりにもカッコがつかないから、せめて、頭のテッペンにトサカでもつけている方がミバエがよい。トサカは色分けしてあり、性別を示す。赤はメス、黒はオス、白は中性、そしてゴールドは「完性」。これなら迷うことなく峻別ができる。そして、彼等は殆ど歳を取らない。加齢は超スローなのだ。永遠の命も、チョット自然の

理に反するから、ま、寿命は平均一万年。（地球人は寿命が短いから、あせって欲深くなり、ろくでもないことを考える。死ぬ間際まで欲の皮を突っ張る）。見るところ、彼等は一万年近くなっても、地球人の老人のようにヨボヨボはしていない。与えられた任務はキチンと果たす。これ以上文明が進化してどうするの？…と私など思うが、彼等は飽くなき探求を、止めようとはしない。

「繁殖」は、個体数を増やさないことが、第一原則。1万年の寿命だから、3千歳と5千歳の時に子供を計二人もうける。子供も青年も病気で死ぬことはほとんどない。老人は、遺伝子の劣化で、オサラバとなる。たまに死ぬのは事故死だけ。どこかの恒星が超新星爆発した際、跳ね飛ばされた小惑星などが飛んでくるからだ。事故死は稀にあるが、個体数は一定に保たれ、過剰人口による諸悪の根源は、厳密に封印されている。

さて繁殖の具体的手法だが、サッカーボールが2個寄り添ったところで、簡単には子は生まれなない。地球上の大腸菌みたいに、ピリという管状の突起を伸ばし、相手の細胞膜を突破し、遺伝子を交換して、リニューアルをはかり、新個体を生み出すか？ 別に交接器がなくとも、生殖細胞の遺伝子交換はできるはず。偉大な文明を創造する子孫作りなのだから、そう単純なものではないとは思うが。私とて、いくらズーザーしくとも、あまり具体的な方法までは聞けなかった。

そして最後に、私が最も驚かされたのは、エイリアンの「栄養摂取方法」。新陳代謝するそのシステムの意外な方法であった。X星でもやはり、植物的な生物は、主星からのエネルギーの供給により、無機質から有機質を生み出し、栄養としてい

る。しかし、地球では植物が作った有機物を動物が横取りして生命をつないでいるが、なんとX星では、動物の体表面には、主星からのエネルギー供給により、無機質から有機質を作る地球上の葉緑素のようなものがビッシリ張り付いており、栄養素は、自給自足するシステムが完成している。即ち植物と動物が合体した構造なのだ。他の生物を犠牲にしなくとも、動物は生命を維持できるのだ。地球の生物のように根本的に栄養を奪い合うというシステムが存在しないのだ。これなら正に完璧。自己解決型である。これで桁外れの倫理観に満たされている理由が納得できた。

【古老エイリアン殿、ご教示ありがとうございます。】
後発地球文明は、大いに啓発されました。そして古老は最後に、『地球人は自分達で母星の居住環境を荒らしておき、他の惑星で住みよい新天地があれば、そこへ移り住もうなどという考えは、絶対に許せない。もしそのような暴挙に出るのであれば、我々は黙っていない。』更に、浅慮の物質文明発展により、環境汚染や資源枯渇、絶滅危惧種を増やすなど、その対応も満足にできずに、宇宙に飛び立つなど、物の順序が間違っている』と強く念を押された。】

地球上では、そもそもは、植物的な生物から動物的な生物が枝別れし、動物は栄養を自己解決できない「従属栄養」で生きている。そして、動物も単細胞から多細胞へと進化し、元々メス的な生殖システムが変化し、途中から（7, 5億年前）オスなるものが発明され、それまでのクローン増殖から、雌雄が遺伝子を持ち寄って、バリエーションに富む子孫を残すことになった。地球の環境は刻々変わる。気温・酸素濃度・海水PH・紫外

線・食糧となる植物相・天敵など数限りなく環境は変わる。結果として、その変化に、うまく順応できたもののみが、子孫を残したことになる。

地球上の生物の基本をなすDNAは、利己的に何が何でもオレだけは生き残ろうとする。生物は、意識しようとしまいと、そこに競争原理が働く。こうして進化した人類は、私の最も嫌いな『オレさえ良ければそれでよし』とする基本原理が生まれた。チットヤソットの道徳教育などで、人類のこの傾向は変わるものではなからう。

しかし、この地球上で、子孫が末永く繁栄していくためには、折角膨らましたこの大脳を、フルに回転させ、諸悪の根源である過剰繁殖を抑えるべきだ。資源枯渇に至るほどの活動を制限し、過剰な欲望を断ち切り、もっと倫理観に満ちた高次元の生物へと進化すべく、方向性を自ら変換していくべきだ。そうすれば、高度の文明を築いた宇宙人と対等に付き合っていける。現実からの逃避では、事態は何事も改善されない。謙虚に反省しながら、明るい未来を夢見て前進すべきだ。

東北関東大震災

兼平ちえこ

三月十一日午後二時四十六分頃、東北、関東地方を震災と言う未曾有の自然の猛威が襲いました。被災された皆様には謹んでお見舞い申し上げます。

無念にも亡くなられた皆様にはお悔みを申し上げます。心よりご冥福をお祈りいたします。

当地、石岡も瓦屋根の破損、塀の倒壊、道路の

隆起や地割れ、そして歴史的遺産である文化財の破損等々そこかしこに被害が見られました。

停電三日後、回復によってテレビに映し出された東北沿岸の光景は凄じい勢いで海水が街並みを呑み込んでいく。押し流される車、車、車……。早く早く高台へ逃げてと祈るばかりでした。時が経つにつれ、想像を絶する死者、行方不明者の数、日本中は悲しみと涙に包みこまれました。そして、更に自然の猛威は人の造り出した放射能という、人に恵みを与えていたはずの科学物質を、魔物に変化させ日本そして世界を震撼させている。家族を失い、家を失い、原発事故で遠く離れてのそれぞれに過酷な避難生活の中でも、画面で拝見すると子供さんの笑顔と被害者皆さんから出る「ありがとう」「うれしい」の感謝の言葉と笑顔が多く見られ、日常生活を送る事の出来る私達を励ましてくれている。思わず「がんばって！」と叫んでしまう。

復旧の道のりは遠く、原発の問題も長いかもしれません。私達も含め命の大切さをかみしめ、贅沢（便利さ）を避け、不便さの我慢、そして工夫をしながらの生活を心がけようと思うのでした。

早速、主人と二人暮らしの私達は、①夕食後の居間の電燈は消し、電気スタンドとテレビの明るさで充分である。主人曰く、目悪くしないか……。しかし地震後三日間の停電での懐中電灯生活は、幼い頃のランプ生活を懐かしく思い出させてくれたのでした。大丈夫！暗さにもめげず、視力・五健在である。②エネルギーの大切さを感じつつ、一日置きのお風呂。③人の意見に惑わされる事なく、常に情報を取り入れ自分なりの判断で行動する。そして④は今月の「ふるさと風」の勉強会で

皆さんとの話し合いでささやかですが義援金を送る事になりました。

こうした個人、個人の節約や義援金で少しでも被災者の皆さんへの温もりが届きますように、明日への活力になる為にお役に立ちますように願っています。

「わが身は顧みず、何事も被災者第一」の方針を貫き、毎日寒い中、乾パンと缶メシと水を食しながらの自衛隊の皆さん！

地震発生して九日目におばあちゃんとお孫さんの奇跡の救出の時の若いおまわりさんが「警察官になってよかった」と発していた警察官の皆さん！

第一原発に足を踏み入れて見ると津波や爆発で散乱した瓦礫に侵入を阻まれた現場で見事に任務達成なされた東京消防庁ハイパーレスキュー隊の皆さん！

修復努力なさってる原発関係の皆さん！

厳寒と余震の中、慣れない土地での救援活動の外国の皆さん！

日本のボランティアの皆さん！

お仕事、お役目とはいえ悲惨な現場の中を本当に本当にお疲れさまでございました。これからも続く、命をかけての救援活動。ご尽力なさってる皆さん、そして支えておられるご家族の皆さんのご苦勞を思い、感謝の気持ちを持ち続け応援しています。

最後に震災後たくさんの感動がある中、二つほどに残っている事をご紹介しますししょう。

新聞に掲載されていた一部分

放水消防隊（ハイパーレスキュー隊）が報告会

「皆さんの家族や奥さんにすまないと思う。も

う言葉にできません。本当にありがとうございます。隊員からの報告を受けた石原知事は、涙を隠さず、深々と礼をした。

石原知事は、被曝覚悟の活動を「まさに命がけの国運を左右する戦い。生命を賭して頑張っていたのだいとおかげで、大惨事になる可能性が軽減された」と称賛。さらに、「このすさんだ日本で、日本人はまだまだすてたもんじやないということを示してくれた」と声を震わせた。活動報告会に参加した隊員の一人は「あの強気の知事が涙を流して礼を言ってくれた。上からものを言うだけの官邸と違って、われわれのことを理解してくれている」と話した。

テレビ映像での報告

茨城県大洗町も津波に襲われ、被害をうけたが若い消防士の二時間半に及ぶ呼びかけに死者を一人もださなかったということであった。

消防士さん（十九歳）は地震後、即座に防災無線放送で「津波警報、高台に避難して下さい！」と叫び続け、途中からは命令口調（上司の指示で「急いで高台に避難せよ！」になったそうで、「第二第三の津波があるので解除があるまで戻らないように！」と叫び続け、町民の命を救ったとの報道であった。

隊員を思う心ある上司と、適格な指揮命令をくだせる上司と、第一線で活動する隊員の皆さんにとっては、なによりの励みと誇りとなることでしょう。

被災者の皆さん助かった命を大切に一緒に頑張りましょう！

東北関東大震災

小林幸枝

三月十一日午後二時四十六分、地震発生。私はその時水戸で仕事をしていた。突然大きな揺れが来たが、何時ものようにすぐおさまると思ったら、収まるどころか揺れがますます大きく長く続き、今回はもうだめだと思った。

ようやく揺れが収まったら直ぐに停電と断水。仕事にならないのと家が心配で、仕事を中止し、大慌てに後片付けをして帰宅した。ところが道路はあちこちで盛り上がりたり亀裂が出来たりしている。あちこちの家のブロック塀が倒れたり、停電で信号機も点灯しない。事故を起こさないように気を付け、家まで二時間もかかって帰ってきた。

家に帰ると犬たちが怯えたように吠えあつていた。その日は両親が犬子の友人宅に出かけたはずなのでどうしているのか心配であったが、携帯のメールも使えなくなつて連絡のつけようがなかった。

家の中は家具が倒れたり本が落ちたり大変な散らかりようであったが、電気がつかなのでローソクをつけ取り敢えずの片付けを済ませた。犬たちは、私が帰ってきたのと夕飯を与えられたので落ち着きを取り戻した。

心配だった両親は、友人宅から五時間もかかり夜の十一時に帰ってきて、やっと安心した。

停電でテレビも見られないので、どこが震源地でどの程度の地震であるかなど翌朝の新聞を見るまで知らなかった。

東北地方に大津波が襲いすべてが流されてしまっている事を知りびっくりした。大洗も津波で流されたことを知り、妹の住む神栖市が心配になつ

・あなたの笑顔が一番ステキ！

ちえこ

たが、携帯が直ぐには通じなく、随分心配したが無事を知って一安心であった。

石岡市内を自転車回ってみて驚いた。ブロック塀が倒れていたり、屋根の瓦が壊れていたり、石灯籠などもみんな倒れていた。石岡一校前の通りを見てびっくりした。マンホールが高く飛び出していたり、道路が波打っていたりしていた。

スーパーに行つてまたびっくりした。凄い混雑で、飲料水やカップラーメンが買い占められていた。お米も買い占められていて聞いた。薬屋も大混雑。ガソリンスタンドも何キロも並んでも買えなかった。皆がパニック状態だった。

一番の心配は、今でもそうであるが福島原子力発電所の問題である。野菜も酪農も一体どうなってしまうのだろう。エネルギー問題を考えると原子力発電を全くなしてしまふ事は出来ないのだからと思うけれど、先ずは安全の確保を考えてほしい。

九十六歳のお婆さんが、人生で二度の大津波を経験したと話していました。阪神大震災も酷かったけれど、今回の地震の方が被害は大きく広範囲にわたっている。テレビの映像を見ているところからどう復興していったらよいのか分からないほどであるが、ただ涙しているだけでは、何も始まらない。みんなで頑張つてやっていく以外ない。

この大災害で、すべての予定が流されてしまつたが、復興の第一号とでもいうべきなのでしょう、ことば座六月公演の台本の検討稿が、三月末に書きあがつたと連絡が来た。柏木久美子さんとギター文化館で共演することを楽しみに、先ずは自分のやるべきことに集中し、頑張りを示したいと思っています。

白い道

伊東弓子

韓国に行くようになって十年になる。お産の手伝いや入学祝に行く機会だった。娘の家への行き帰りのバスの中から農村、山村の景色を見るのが楽しみだった。そこにはこの国の人達の生きてきた姿を見る事が出来る想いからだ。各地にバスターミナルがあるので、そこから目的地までバスを利用する。各町の商店街を通つてこまめに停車していたのも五年位迄だった。時間はかかったがその土地の人々の生活がよく見えた。

小さな町には人の流れがあつた。買い物をした女達が大荷物をかかえて歩いている。店の外まで品物が並べられて人待つ主人。止まっている車の間をくねくねと走り去るオートバイ。学校帰りの子供達が門前の出店で駄菓子を買つて食べながら歩いていく姿。包装しないで品物を手渡ししてくれる割にはどこへ行つても護美の散らばっているのには驚く。小さな食堂から出てきた客どうしが怒鳴り合っている様子もみた。町から小高い山の中腹にちようちゃんが下っている。旧四月八日「お釈迦さまの日」だから寺で催しがあるという。行つてみたかった。

広い水田、傾斜した畑。季節にかかわらず大切にしているのがわかる。家族中で田植えをしている周りで、子供達は犬と走りまわっている。若い人達が多勢いでじゃがいも堀をしている情景も目に残っている。春先の草焼き、草を喰む牛の影、大型の農機具も活躍していた。小高い山には裸の木々と冬の林をいろどる松が寒さに耐えていた。山全体が栗の花で包まれ臭いが届きそうな情景もあった。ところどころの高い木々にはカッチャガ

の巢もあつた。草摘みをしているお婆さんもみた。沢山の人の生活をみている中で、田から畑へそして山へと続いている「白い道」が目についた。あの道は何故白いのか。どこまで続いているのか。どういう人達が歩いていったのか。今は誰が歩いているのか。私は冬と春しか見ていないが夏も秋もあんなに白いのか。どんな風景よりも印象強く「白い道」を気にしないではいられなかった。

東北関東大震災被災地 及び 被災者の方々へのお見舞い申し上げます

未曾有の大震災のため、ギター文化館では3月13日からのコンサートシリーズをお休みさせていただいておりましたが、4月24日(日)の
庄村清志ギターリサイタルから再開させていただくこととなりました。
どうぞよろしくお願いいたします。(開場 PM2:30 開演 PM3:00)

4月24日(日) 庄村清志 ギターリサイタル
5月1日(日) 大嶋 芳 ギターリサイタル
5月8日(日) 國松竜次 ギターリサイタル
5月22日(日) マリアエステル・グスマン ギターリサイタル
5月28日(日) マリオ鈴木 ギターリサイタル
5月29日(日) 大島 直 ギターリサイタル
6月12日(日) 高橋竹董【Trinity】津軽三味線コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎0299-46-2457 Fax0299-46-2628

その想いをより深くするような出来事があった。それは七年前娘が入院した病院でのことだった。廊下には何枚かの絵が飾られてあった。その一枚の大きな絵には農村の春の様子が描かれていた。農家や畑仕事をしている大人達、庭先で犬を追っている子供の民族衣装からみて時代は現代ではなく五、六十年前の様子だと思う。家畜ものんびりとし花もある。その絵の中にも白い道が山の方へと続いていったのだ。暖かくなったこの絵の季節の中でも周囲の色に交ることなく白さが目立つ道。どうしてだろう。私をこんなにひきつける白い道。娘から謎めいた返事がくるかと期待して聞いてみると、あっさりと答えが来た。道の作り方はいろいろな種類があるそうだけど、白い道は農道が多いとのことだった。そう聞いても納得出来ずにいた。一人あれこれ思いめぐらす日が続いた。

道は野良に行く為の道だったのだろう。いやそれだけではなく、浜の人と農村の人、山間地区の人が物資の交換や交流をしたところかもしれない。いやそこには暖かなやりとりだけでなく、生産分野を広めて豊かになる為に分取合戦があったに違いないし、秘かに恐ろしい出来事も企てられた場所になった事だろう。

又理想を求めて他の国へ向かう道だったろう、と夢を求めた人々のいたことを考えてみた。あれこれ空想していく中で自分が生活してきた周囲にはなかった道の白さがより神秘的で忘れられなかった。

来る度（特に二、三、四年間）に高速道路が増えた。山がくずれ故郷は分断されて形を変えた。以前の風景を目にすることは少しづつなくなった。スピードと車の波の中でいやおうなしに運ばれて

いく自分が身心の疲れを覚えるだけになった。目的地に早く着くということはどういうことだった。それでも走り去る景色を目にとめようと必死に窓から外を見る。ゆっくりと味わうこともうすくなり後に飛んで行ってしまう。紅白の旗をかかげた小さな寺に。パンツが乾してあるのに声をあげたり、柳の木がうぐいす色がかって水面に水鏡しているのに声をあげた、ああ！あの感動の日があったことを有難くおもおう。田畑の一部が埋められて建物が増え様子をよく目にするようになった。こうして時の流れは次の時代をつくっていくのだろう。負けないで感動を求めていこう。まけないで。

今年の早春、娘に合う機会が出来た。十年間暖め続けた白い道への謎とときの経験を見せてもらったのだ。まるで娘が私の心の奥を知っていて案内してくれたような偶然が重なった。

一回目は町から田舎に入って白い道を過ぎると一層山は深く歩いて登った。国対国の戦いの距点となった山で、あちこちに砦の跡があった。敵、味方どちらにとっても大変な場所だったろう。

二回目は借りている畑に「ネギ」摘みに行った時だった。すれ違うことの出来ない白い一本道を進む、小さな集落を三ヶ所過ぎるともう白い道はなく山と田、畑に添って枯草、枯葉を踏んで歩いた。畑と山の境はわからないような所だった。生産高を上げるために上に上に耕す場所が広がっていったことだろう。山に住む人も自分達の範囲をせばめられては大変だったことだろうし、争いは当然起きたらうと高い山を見上げ、今歩いてきた里の方をふりかえって眺めた。流れもかれて処々に水たまりがある程度なのにどこからかかえるの音が聞える。ネギはまだ小さくて摘んだとい

う量ではなかったが、春の空気をいっぱい吸いこんで帰ってきた。白い道を自分で歩いてみると遠くでみた白さや感動はあまり感じなかった。

三回目は大部遠い観光地へ行く途中のことであった。トンネルの入り口に男女と男達四、五人の絵が描かれてあった。冬枯れの山、色あせた絵、コンクリートの肌からこの物語の悲しさが伝わってくる一瞬だった。歴史的な話しか伝説かだろうが、この山の物語なのだろうと思うとこのアイデアを出した人達に拍手をしたかった。運転している娘に問いかけると昔語りをしてくれた。

若い男女がこの山を越えて行こうとした。何を求めていくつもりだったのか。険しい山を登り始めたそう。相当の覚悟だったろうと思われるが山は二人の前に立ちはだかっていた。二人は離ればなれになったそう。娘がたどりついた所は山の中腹にある部落だった。事情を聞いた村人達は「ここで待つがよからう」と安心出来る場所を用意してくれたそう。始めは指を折りながら明るく待っていたが、だんだんと口数が少なくなり、村民と合うのをさげ家にもなるようになっていった。紅葉した木々も葉を落とし、鳥やけもの声も絶え村人が冬支度もすんだ頃には、一人歩きする娘の姿が多くなり、雪が山を包み外に出られなくなる。ただ泣くばかり、食も細くなって寝こむことが多くなり村中が心配に包まれた。春がくればきつと元気になるだろうと皆待ちどおしかった。その期待をうらぎるような結果となってしまったのは紫つつじの咲く頃だった。池に娘が横たわっていたのだ。とむらいの支度を始まったところに一人の立派な若者がやってきたという。その人こそ一年前にはぐれてしまった相手だった。さまよ

将であり、良将の兄・下総介良兼は将門にとつて伯父になる。ところが、この良兼が去る延長九年（承平元年＝九三〇）から、女性をめぐることで将門と対立し、伯父・甥の仲が険悪になった……

そして此の後に続くのが唐突とも思える合戦の場面でありトラブルになっていた平良兼とは全く関係の無いような人物が平将門を待ち伏せする。

「裏等野本に●①扶等陣を張り、将門を相待つ。遙かに彼の軍の体を見るに、所謂轟嶮②（とうくつ）の神に向かひて、旗を靡かせ鉦を撃つ。轟嶮は兵具なり。獣毛を以て之を作る。鉦は兵鼓なり、諺に云くふりつづみなり。爰に将門、罷めんと欲ふに能はず、進まんと擬（す）るに由なし。然れども身を励まし勧め抛り、刃を交えて合戦す。将門、幸ひに順風を得て、矢を射ること流るるが如く、中る所案の如し。扶等励むと雖も、終に以て負くるなり。仍て亡ぶる者数多く、存（ながら）ふる者已に少なし」——（注①●は欠字部分、②「轟嶮」は古代に皇帝又は將軍が戦闘に際して掲げた三角の旗で、旋毛の様な牛の尾や雉の尾で飾る。（つまり本格的な戦闘態勢のこと）

意識すると「平氏一族では無い源扶（みなもと）のたすく）らが、将門の行く手を遮るように野本に轟嶮の陣を敷いて待ち伏せしていた。それに気付いた将門が全体を見回すと、敵側は戦闘態勢が整った部隊である。将門たちは所要で出かける途中なので合戦の準備などはしていない。しかし避けるも退くも出来ないから、携帯していた武器だけで必死に闘い、奇跡的に勝ってしまった……」

此の俣では、浦島太郎では無くて桃太郎が竜宮城へ行って乙姫様にも会わず、花咲爺さんと喧嘩をするような辻褄の合わない話になってしまう。

つまり書き出しの部分と野本（場所、つくば市と筑西市の境界付近、鬼怒川東岸？）合戦の話との間には「何が原因で、そうなったのか？」——かなり長い文章で説明が必要なのである。冒頭に「聊か女論に依りて……」と書かれているから第三者として女性が登場し、そこで三角関係になったか、四角四面で話がこじれたか、五角ならぬ誤解が生じたか、その女性は何処の誰なのか……主役らしい平良兼が登場しないことも含めて、週刊誌の芸能界ゴシップ記事ほどでは無くても具体的な説明記事がなければならぬのだが、それが欠落している。争いの起こった原因が分からないのである。

平安時代の恋愛小説でも書くのであれば、その方が都合良く、美男美女をやたらと登場させては接着剤でくっつけなければ済むのであるが、歴史となると、そうはいかない。そこで帝国主義の禁制から解放された昭和二十年以降は、いろいろな立場の方が「平将門」の物語を著しておられる。

石岡市史でも、特に「下巻・通史編」に事件の全容が分かり易く要点を抑えて記載されている。そして昭和四十年代と記憶する頃には「平将門ブーム」が起こった。二〇一〇年現在、NHKが再び大河ドラマで平氏の誰かを登場させようと企画しているようだが、将門の場合で言えば、原作者がどなたでも争乱の発火点である「女論」の内容が「将門記」に書いてないために、著者の主観で平将門の評価が大きく変わって「その功罪」が都合良く相殺されてしまうように思える。特にドラマの主人公は、それを演ずる俳優の個性や人気で不自然な脚光を浴びるような印象を受ける。

そうした中で平将門を書いた出版本で言えば——①明治の文豪・幸田露伴が封建化する時流に抵抗

して著した「平将門」、

②茨城県出身の郷土史家で大臣を歴任された赤城宗徳の「平将門」、

③当時の国学院大学教授（文学博士）林陸朗の「史実 平将門」（いずれも敬称は略させて頂く）、

以上三著作は史料に沿って事件の概要を追って行く手法で俗説にとらわれない「平将門像」を浮き立たせており、読む者が偏見を持たずに事件の大筋を知ることが出来る——自分のイメージを作ることが出来る、と私は感じている。

幸田説は「あらゆる歴史は嘘である」とする自分の精神的主張に従って反乱に至った将門の心理に迫り、平国香を頂点とする桓武平氏一族と常陸大掾（だいじょう）職の前任者で下妻付近に拠点を持った源氏（嵯峨源氏と推定される）一族とが婚姻を通じて親しみ常陸地区に広げていた勢力圏への加盟を、新参者の将門が拒否したことを対立の構図に挙げている。長老である国香の代理として甥の将門に接していた良兼は、将門の結婚問題を機に敵と味方になり合戦に及んだとする。

赤城説は「同郷の誼みと郷土愛」で史実の解明に努め将門の人間性を浮き彫りにした。長年に亘り「悪人」とされてきた「平将門伝説」を一つ一つ検証し公平な判断で出来事のは是非非を明らかにしたのである。そして「将門記」が冒頭に示した「女論」は二次的な理由とし、主な紛争の原因を領地の争いとした上で、特に当時の社会情勢が、藤原政権の無策と怠慢の所為で混乱状態に陥っており、力の或る者が頭角を現すチャンスが有ったこと、その兆候は平将門の行動を契機として源平両氏に代表される武士の台頭に繋がり「源頼朝が鎌倉幕府を開くに至る道筋を平将門がつけた——平

将門は源頼朝の恩人である」と断言した。

林説は、史実と伝説が混同されているという見方で、一般に言われている「将門の祟り」から説き起こして、女論や土地争いには拘らず「将門記」を考察しながら争乱の概要を分析してその原因を考え、同時に起こるべくして起きた藤原純友の乱との関係にも触れて、萌芽期に於ける武士団の形成と、それを助長した藤原政権の腐敗に根本原因を求めている。この著書では将門に攻撃された当時の実質的常陸守とも言うべき「常陸介・藤原維幾（これちか）＝国香の義弟」とその息子の横暴にも争乱の原因を当てている。

この三作品は、将門を主人公とした作品に広く引用されており「平将門」という名の「猛虎」の顔が見えない中で、それを正確に描いた名画のような作品だと私は勝手に思っている。

…田舎の爺さんは、ここで感心だけしていれば良いのだが…実は将門ブームの時代に個人的興味で「平将門」に関する著書を片端から読み、将門に関わりのある場所を調べて回るなど、見聞したあれこれを元に自分なりの「平将門像」を画いてみたことがある。そこで感じたことは…

承平・天慶の乱を伝える神皇正統記、日本外史や前太平記などは「平将門は朝廷に反逆した賊である」と言う理由から、権力に諂（へつら）って書かれたとされる。歴史として、それが正しいのであれば既成概念のように「逆賊」のレッテルを張られてしまった「平将門」は何処へ行っても悪人でなければならぬ。しかし私が見聞した結果からはそれが出て来ない。本来は、戦った双方を悪人とすべきところ、将門だけを悪人にした―その反動のようなものが見えるのである。

争いの結果は「勝てば官軍…」で、合戦の是非に依らず負けた方は粗末にされるのが通常なのに千年も過ぎた現代でも過去の敗者・平将門が丁重に扱われている事実がある。その代表的な例が墓所である。そして、親鸞聖人の言葉ではないが「…善人なおもて往生す、況や悪人をや…」で、墓に入ってしまったら平等であるべき筈なのに何となく差がある。然も、その差たるや従来の歴史とは全く逆な現象で出ているのはなぜであろう。

そもそも、この騒動の発端は常陸国に土着した桓武平氏一族の争いとされている。対立した一方は平将門であり、相手側は将門の伯父で長老の平国香を頂点とした桓武平氏一族である。しかし、実際にはそうでは無かった。将門と伯父たちとは、領地問題などで不仲になつてはいたが、合戦を始める程に対立していた訳では無いらしい。

そこに無理やりダイナマイトを持って割り込んできたのが源護（みなもとのまもる）である。源氏と言つても此の場合の源氏は後の代に登場する源氏とは違う流派で、どういう素性なのか分からない。一般には名前が一字なので嵯峨天皇か息子の仁明天皇の系統であろう…と推測されており、石岡市史（通史）は「源恭（つつしむ）」と言う人物の子と推定している。何しろ嵯峨天皇も仁明天皇も（他の天皇も…）養鶏場の鶏のように数え切れないほど子孫を増やしたから、皇族でも「その他大勢」が多くて掌握しきれないようである。

事の始まりは、常陸平氏の内輪の揉め事に対して素性が知れない源氏が出しやばつて介入したから事件になったのである。そもそも親王が治める国で現職の高官とOBが当事者となった事件であるから「喧嘩両成敗」の大原則を適用して双方を

厳しく罰しておけば大事にならずに済んだかも知れないが、常陸国府の役人にも中央の藤原政権に巢食った公家どもにも、これを解決する能力が無かったようである。

平和の「平」を姓にしながら馬鹿騒ぎを起こして人民を苦しめた連中は、双方とも苗字を「乱（みだれ）」と変えて遠くへ追放すべきであつたし、「源」のほうは争乱の源であつたから、字はその俣で「ダメモト」と読ませればよかった。

尤も国府の役人の言い訳を聞けば「…何しろ国府のトップにいる方の身内の騒ぎですから、とても手が出せませんでした…」と言うであろうが結局は、そのような地方自治の体制を作っていた―地方は税を絞り出すだけの存在にしかしていなかった奈良・平安時代の天皇と政府が悪い。その結果、次第に戦火が拡大したのである。

度重なる合戦の結果、負けた側の平将門は遺体が分解されて、先ず首だけが京都に送られたけれども航空便で戻されて東京・大手町の旧・官庁街に首塚として葬られた。残された胴体のほうは「どうでも良い」と言う訳にもゆかず、坂東市岩井にある神田山延命寺という真言宗の寺域に胴塚として埋葬された。その場所は将門が討ち死にした場所の近くである。近代になってから「首と胴は一緒のほうが便利である」と言う理由で合葬されたと聞いたような気がするのだが思い出せない。

他にも常総市石毛には豊田館付近の将門本拠地跡と西方丘陵地の一族墳墓に平将門の墓があり、守谷市にも後裔の相馬氏が建立した墓など各地に存在していてそれなりの謂れがある。中でも話の展開上、後で述べるが、筑波山麓の北西側には「千年の時を守られてきた平将門の秘墓」と呼べるよ

うな小さな、それらしき墓が存在する。

それに比べて、対抗した側の代表者になる平国香の墓所とされるものは何となく怪しい。墓所の本来は死者の霊魂を祀る場所らしいから何か所に在っても別に構わないのだが、その必然性が尤もらしく説明されていることが必要である。

江戸時代末期から明治・大正にかけて当時の郷土史家が書き残した「地誌」の類いに「常陸大掾に任命された平国香が筑波山の西麓に館を置き、広い領地を持ち、国府の大掾職になって石岡に城を構え、その子孫が大掾氏を世襲して二十五代続いた」ようなことが書いてある。その所為で石岡市内の曹洞宗・平福寺は「平国香の開基」であり国香の墓も其処に置かれていとされてきたが、歴史解明が進んだ現在では誰も信じていない。

まず平国香が常陸大掾職に任命されたのは承平元年（九三一）頃と推定されている。上司に当たる常陸介は藤原一族であり、その頃に交代があったかも知れない。大掾職の前任者が将門を待ち伏せ襲撃した源氏三兄弟の父親・源護である。将門に攻められて死亡する国香は、在任中の数年間のうちに上司の常陸介や前任者の源護に接近し、縁組を通じて国府内の地位を固めてゆくのであるから、国府のある石岡市内に私的な勢力を伸ばし、菩提寺を建てることなどは出来る筈がない。

平福寺は、鎌倉時代以降に石岡に進出し途中から大掾を名乗った水戸の馬場氏の墓所と言われるから、それ以前の常陸平氏の墓地にはならない。何よりも平福寺の在る辺りは、古代から馬の集積地であったと記録にある。平国香の時代も勿論であり、そう言う場所を菩提寺には出来ない。

また「大掾」は律令制国家の地方職なので世襲

で任命されるとは限らない。平国香から始まって八代までは財力に物を言わせて世襲に成功していたから「多氣大掾（たけのだいじょう）」を称していたのだが源頼朝に潰されてしまった。

その跡を貰ったのが支流の吉田氏の、さらに支流の馬場氏である。時代が中世に移って律令体制も崩れ、頼朝が守護・地頭制度を敷いたため地方国府の存在価値も薄くなった。それでも常陸国は鹿島神宮があるので形式的な仕事で大掾職が必要となる。馬場氏に其の任務が与えられ「大掾」を称することが許されたのである。つまり平国香の流れを継ぐ多氣大掾氏と、水戸から石岡に移って来た馬場大掾氏とはパイプの太さが違う。それを無理に一本に繋げてしまうと「石岡に国香の墓がある」というような嘘が伝わることになる。

「常陸国の歴史・地理百科事典」とも称される「新編常陸国誌」は、崙書房などから出されている貴重な本である。水戸藩領内に生まれ育った中山信名という人物が誰に言われるでも無くコソコソと始めた作業が出发点らしいから偉業である。

中山信名は、馬場大掾氏七代目の高幹から分かれた家系で久慈郡に住んでいたとされる。その人物が編纂した「新編常陸国誌」の「墳墓」の項には「常陸大掾代々墓」として府中の平福寺のことが記載されている。『十二代皆五輪塔にして、誰某の分別あることなし、単に大掾十二代の墓と称す、中央にあるもの尤も大なり、これ平福寺の開基と見えたり、左右にあるものは、それよりくだれり、大掾満幹府中に永住してより、子孫代々かしこに住したれば、満幹以下は必ず此の地に葬しとみえたり（中略）大掾伝記の書きつきによるに、詮国、①満幹、慶松（中略）、頼幹（中略）、清幹、高幹

常幹、慶幹、貞国、清幹これにては九代なり、其外は婦人の墓か、或いは其より前にも、府中にて死たる人は、ここに葬しもはかるべからず」とある。（①注…満幹は鎌倉で殺害されたので、此の地に墓が無いかもしれない…としている）

平福寺の墓域にある大小十数基の五輪塔の中で最大のものが平国香の墓に擬されているようであるが、茨城県内の主要な寺を収録した「茨城の寺」には「平福寺が長いこと無住寺で…その期間は百年とも言われる…」とあり、近くにある同じ宗派の清涼寺との深い繋がりを説明している。清涼寺は馬場系大掾七代目の高幹が尼寺ヶ原に開基した寺であるから、平福寺も大掾氏歴代の墓所には違いないのだが「新編常陸国誌」が記録したように平国香の墓とは無縁なのである。

或いは「国香の供養塔」が在ったかも知れないのだが…勿論、支流大掾氏の墓に多氣大掾始祖の平国香を祀っても構わないけれども、其処まで気を使うなら北条氏や八田氏の陰謀に加担して大掾本流を没落させ、跡目をそっくり頂戴した馬場大掾氏なのだから、恨みを吞んで伊豆に蟄居させられた最後の「多氣大掾平義幹（たけのだいじょう）たいらのよしもと」の墓でも建ててあげたほうが筋は通るのではないか（余計なお世話だが…）

それよりも、石岡の人たちは余り重視していないようであるが、平福寺の境内に建てられた「常陸大掾氏遺墟碑」は貴重である。明治二十九年に重野安繹（しげのやすつぐ）が地元の大掾氏関係者に頼まれて「石岡は常陸平氏発祥の地である」ことを漢文で書いたもので、常陸国府と桓武平氏のこと、馬場系大掾氏の石岡定着、室町時代に始まった没落の歴史などが刻まれている。

重野安繹は薩摩生まれ、江戸末期から明治初期に活躍した歴史家の第一人者で、文部官僚から東京帝国大学教授、元老院議員に至り、多くの歴史考証を成し遂げた人物である。そのような時代の「お偉いさん」が田舎の寺の碑文を書いてくれたことは破格であろう。しかし文中にも「此処に平国香の墓がある」とは書いてないと思う。

もう一か所、かつて那珂郡湊村と呼ばれたひたちなか市にある浄光寺という本願寺派の寺には「国香墓」と書かれた金の壺が出た——という話が存在したらしいが、此の寺は十三世紀頃の創建だそうで真実性が薄い。現在では寺伝にも壺のことは載っていない。ただ「新編常陸国誌」の巻八には歴史上著名な人物の「墳墓」を掲載していて疑問を呈しつつ、何処にも無くては気の毒と思っただろうか、此処だけを「平国香墓」としている。

「茨城の寺」には記載されていない寺で、龍ヶ崎市川原代町にある天台宗の安楽寺には平国香の供養塔があるという。これを知ったときに「なぜ、国香が龍ヶ崎のほうに？」と心当たりを考えていたところ「前太平記」に面白い記事があったことを思い出した。真偽のほどを聞かれると辛いところもあるが、概要を紹介しておく。

その頃、平国香は土浦の城にいた——土浦城に伝わる説では常陸国府（石岡）を攻める決心をした平将門が攻撃準備のための拠点として縄張りをしたのが土浦城と言うことになっているから、最初から信じ難い話ではあるが——ともかく国香が居た土浦城に将門の率いる二万余の大軍が押し寄せてくるとい情報伝わった。これを迎え撃つ平国香の許には二千五百の兵しかない。

土浦城に籠るのは不利と、国香は兵を纏めて佐

貫・藤代まで出陣し小貝川を渡ってくる将門軍を射倒すことにした。承平七年十一月十三日、両軍は小貝川で矢戦を交えた。この時に将門の射た矢が敵方の一武將を射抜いてからついでに傍に居た国香の右脇に深々と刺さった。総大将が重傷を負ったため国香の軍勢は一斉に退却して土浦城へ戻り、そこで国香は「俺が死んでも、すぐに葬式は出すな：将門を討ち滅ぼしてからにしろ：」と遺言をして翌日に死んだ。ところが国香の死を察知した軍勢は、先を争うようにして逃げ出してしまったからお葬式どころではなくなった。

将門記などによる平国香の死亡時期は承平五年とされているから、この小貝川合戦そのものが怪しい話ではあるが、戦場に近い龍ヶ崎市に国香の供養塔があるのは、桓武平氏と関わりのある誰かが此の地方に居たことを示唆している。勘ぐれば碌な葬式も出して貰えなかった平国香への言い訳で書かれた話のようでもあり、平氏一族の誰かが書き遺した嘘であろう。国香の最後も、実際には気の毒なほど淋しいものだったらしい。「藤代合戦」ぐらいは創作しても許される。

そして筑波山の表側登山道入口から西北方向に向かつて数キロの地点には平国香が住んでいた東石田（ひがしだ）の館跡がある。後から述べる理由で将門に追い詰められた国香は此処で自害して果てた。その場所には今でも粗末な石が置かれていて地元では国香の墓と伝えられているが、その場所は既に個人が所有する畑になっているから立ち入りも自由には出来ない。つまり誠に気の毒ではあるが「これが平国香の墓である！」と胸を張って堂々と言える場所が無いのである。

平国香は後に天下を取る桓武平氏の系列中で極

めて重要な位置に居た人物である：「平家物語」は、平国香が平氏の実質的な始祖に当る人物であることを（平氏の）先祖を尋ねれば、桓武天皇第五の皇子一品式部卿葛原親王（中略）御子高親王、無位無官にて失せ給ひぬ。その御子高望王の時、始めて平の姓を賜ひて、上総介になり給ひしより以来、忽に王氏を出でて人臣に連る。その子鎮守府將軍良望、後には国香と改む」と記している。皇族を離れ、民営化された平氏としての始祖が国香であるから、子孫に大切にされても良さそうなものだが死後は粗末にされている。

つまり、これこそが有名な「平家物語」の第一「祇園精舎の事」に出てくる決め台詞の「：諸行無常、盛者必衰：驕れる者久しからず：猛き人も遂には亡びぬ：」の見本であり、御先祖の国香が身をもって平家の子孫に示したのだから守られなかった。喧嘩相手の平将門にとっても同じであるが将門の場合は死んでからの評判が良いのである。

国香の嫡男である平貞盛は「平将門の乱」を平定した後に、広大な領地を弟の繁盛に譲って自分は都へ戻り下級官僚に復職した。同じ桓武平氏でも葛原親王の長男（高棟王）の系統は地方に土着せず京都に留まり中級官僚として藤原一族に飼われていた。国香系のように広大な土地は持てなかったが、藤原氏の顔色を窺っていたれば地方の国司として任命されるチャンスが巡ってくる。その子孫が平清盛夫人となった時子である。

平貞盛も争いが解決してから広大な領地と官僚の肩書と、どちらを選ぶか暫く迷ってから、結局は虚栄心に負けて肩書を求め都へ戻った。上京してからは、父親の墓参に帰って来たことも無いであろう。尤も、父親が源護に協調して起こした将

門襲撃に失敗して自殺したとき下級役人であった貞盛は、国許からの電報で変事を知り、勤務先を休職して常陸国へ来たのだが父親の遺体は見つからなかったらしい。「平国香の墓」と言われるものが少ないのも、それに起因するかも知れない。後で述べるが、現場に来て父親の死に至る真相を知ることが出来た貞盛は、その時点では将門を短絡的に「敵」とは認識しなかった。しかし騒動の張本人である源護や平家側の叔父たちが白黒テレビ時代劇の見過ぎで「仇討ち」を強要するので、消極的だが一味に加わり、合戦を繰り返すうちに、食うか食われるかであるから従兄弟の将門を宿年の敵とするようになる。

常陸平氏の本流を相続した貞盛の弟（繁盛）も膨大な財産を貰うだけ貰うと、父親の墓などはどうでもよく思うようになったのであろうか：天皇の子孫と言う重荷を引きずる当時の豪族が競って都での官職を望む中で、父・高望王の意志を継ぎ常陸国に土着して領地を広げることに専念した平国香も、死んだ途端に家族に冷たくされた―後の世に西郷隆盛が「子孫の為に美田を遺さず」と言ったようだがとても間に合わない。

息子たちの行動は、国香が死んでから分かったことなので仕方がないが、そもそも平将門に最初の合戦を挑んで見事に負けた張本人は源氏の一族であり、国香は源氏と縁戚だった関係でトバッチリを受けたことになる。その上に死後の墓が館跡の石だけとは、正に「はかない」：それに反して逆賊とされていた平将門の墓が各地にあつて、密かにではあるが大切にされてきて、線香の煙が今に絶えないのはなぜであろうか：顧みる価値はあると思うのである。

まず将門記冒頭の「襲撃事件」は巻首の欠落も有るから断定は難しいが文の俣だと、攻撃された側が無防備に近かったことから明らかに平将門が仕掛けた戦さでは無い。奇跡的に勝った将門たちは逃げる敵を追いかけた。合戦が起こった場所は筑波山西麓から明野工業団地北方を通り、小貝川大橋を渡って下妻に至る県道一三二号線沿いの赤浜交差点から上野小学校辺りと推定されている。

源氏の館は下妻市東北部の大宝八幡宮近くに在ったのだが将門主従を待ち伏せした関係で、負けても自分の領地方向には戻れないから筑波山麓方面に逃げるしかない。途中の東石田には平国香の館がある。常陸平氏頭領のお住まいは、さすがに城郭建築が本格化しない時代でも城郭並みの威厳がある。通常ならば、一旦は下館（筑西市）方面に退却してから下妻の家に逃げ帰れば良いのだが、平国香が襲撃側の中心人物であつたから、敵兵は近くにある親分の館に救援を求めて駆け込んだ。

石岡に住む者としては、郷土に縁のあるお方なので出来れば歴史をすり替えて弁護したいのだがそうもいかない。源氏の兵がすんなり逃げ込んだことから、伯父であり一族の長老である国香が敵側であることを知った将門は頭に血がのぼった。

卑怯な不意打ちの黒幕は、自分の後見人として頭を抑えていた国香であると知つたのである。勢に乗った将門主従は、足りない武器を敵の戦死者から奪い、伯父の館へ攻め込んだ―のであるう、と推測したのだが、この辺りの状況を記した将門記は次のように述べているのである。

「其の四日を以て、野本・石田・大串・取木等の宅より始めて、与力の人々の小宅に至るまで、皆悉（ことごと）く焼き巡る。屋に蟄（かく）れ

て焼かるる者は、烟に迷ひて去れず、火を遁（のが）れて出でる者は、矢に驚きて還り、火中に入りて叫喚す。●（欠字）の中、千年の貯一時の炎に伴ふ。又、筑波、真壁、新治三か郡の伴類の舎宅五百余家、員の如く焼き掃ふ。哀（かな）しき哉、男女は火の為に薪となり、珍財は他の為に分つところとなりぬ。三界火宅の財に五主あり、去来不定なりといふは、若しくは之を謂ふ歟（か）」

意識すると「反撃に出た将門は、敵側の館がある野本・石田・大串・取木などから、敵に味方したと思われる連中の家まで攻め込んで火をかけて回った。攻められたほうは火の付いた館に隠れることも出来ず、外に出れば弓矢に狙われ逃げ場がない。混乱の中に蓄えていた財産は燃えてしまひ命まで失った。将門勢は、さらに筑波郡、真壁郡、新治郡の各所に散在していた敵側の協力者や関係者を襲い合わせて五〇〇余の家々を焼き払った。奪われた財産も少なくない。昔から仏教の教えで、この世の財宝などは五人の持ち主があると云われるように、何処に消えてしまふか分からない：」

あるいは合戦場面の誇張かも知れないが、この記述は極めて不自然である。文中の「其の四日を以て：」は、最初に将門が待ち伏せをされた日なのか日を改めてのことか、解釈が分かれているらしいが、攻撃の規模をみると日を改めたことになりそうである。それならば勢力的に圧倒的な規模を持つ源平連合軍側は広範囲に亘って攻め込まれる前に態勢を立て直し、防備を固める時間があつた筈なのに簡単に負け過ぎる。また其の日の四日であれば極めて小人数の将門軍が、幾ら調子づいていたとしても広い範囲に居た敵を攻め続けることが出来る訳がない。信用が出来る筈の「将門記」

にも「初歩的な嘘」があることになる。

反撃が其の日なのか、少し後なのか専門的なことは先生方にお願ひして、いづれにしてもその事件で将門は伯父であり一門の長老である平国香の館に攻め込んだ。平国香は、さすがに「万事休す」と覺り館に火を放って自害したため親族同士の憎悪が無限に拡大し大きな戦乱に発展した。

ついでに述べておくと合戦の際に「火を放つ」のは基本戦法であって、値段の高い矢を一本一本面倒に放って戦うよりも、経費が安くて簡単に敵に大きなダメージを与えるから盛んに使われた。天慶二年（八三九）十一月二十一日には、常陸国府及び石岡市内中心部も其の方法で攻撃されたのである。それどころか約七五〇年後の天正十八年には、豊臣秀吉の許可を貰った佐竹義宣が同じ方法で府中城を攻略し大掾氏を滅ぼしている。

双方の武力行使が激しくなってくると犠牲者も増える。そうなると「平氏一族の内輪揉めから将門が伯父の国香を殺し、それから合戦に拡大した」と簡単に言われている従来の歴史も綺麗ごとだけでは済まされず、根底には双方のどす黒い欲望と、それに基づく近親間の激しい憎悪が潜んでいたことになり「野獣のように醜い争いであった」と言わざるを得ないことになる。平国香や貞盛、将門ら平氏一族と深い関わりのある「歴史の里・石岡」では、もう少しこの事件に関心を示しても良いのでは…と想っていたが、人格者が多い所為か市史に書かれているのに平将門の乱に興味をお持ちの市民の方が少ないように感じる…やがて貞盛が将門を滅ぼし、その六代目の子孫である平清盛が日本六十余州を支配するというのに。

平氏は一代で源頼朝に滅ぼされるが源氏も三代

で消え、その後を継いで鎌倉幕府に君臨したのは貞盛の子・維将（これまさ）から六代目の北条氏である。さらに源頼朝に従った有力武士団の多くが平氏系であったことを思えば、大袈裟な言い方かも知れないが「日本の歴史の大半は石岡に深い関わりがあった」のである―これは嘘ではない。石岡市の歴史は、ともすれば「大掾氏」の歴史を誇ることで済まされる。既に触れたように石岡に居た大掾氏は平氏末流の一支族であり、源頼朝に服従した一武将にすぎなかった。

「ふるさと“風”の会」は「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」ことを目標に掲げている。郷土の歴史が十分に理解されていないことを何よりも残念に思っているのである。

【風の談笑室】

世の中、本当の話しがなかなか広がりや発展がみられないのであるが、根も葉もないような話というのは、実しやかに大きくしかも急速に広がっていくのだからと不思議に思つた。

風評の恐ろしさというのは、そつしたところにあるのだが、何故嘘や根も葉もない方が受け入れられ易いのであるつかと思つた。

実しやかな方が根も葉もあることに聞こえるのは聞く方に問題があるのか話す方に問題があるのだろうか。この問いは実に面白く、愉快な問いだと思つたがどうであろうか。

真実が風評のようにならざるのであれば、これは素晴らしい「真実の拡散」である。

コーヒーブレイク

停電とマシンガン

JICAの仕事で、中米H国に滞在中、通訳のI氏が『昨夜は呆れかえって眠れなかった』と、事の次第を話した。

I氏の隣に住むオッサン（現地人）が、真夜中に庭先で、マシンガンをぶっぱなし続けたというのだ。その理由が聞いて呆れる。オッサン一生懸命働いてやっとテレビを買った。月給6千円ぐらいなので、1年分ではテレビは買えない。嬉しくて夜はサッカーやドラマに釘付け。ところが、国営の発電所は、予算不足でしょっちゅう停電。放送は正にクライマックスというところで、プツン。オッサンよくよく頭にきて、マシンガンを持ち出し、自分の家の塀に向ってぶっぱなし続けたというのである。

今、日本国内では、政治・経済・犯罪多発など、国民は不満に充ちているが、世界を旅してみても日本ほど、治安や衛生の安定した国はない。中米の国々では、今でも西部開拓時代さながらの、銃による抗争など日常茶飯事。新聞には、目を背けたくなるような死体の写真など毎日載っている。銃を取り上げた警察官が裏でその銃を横流し。子供を誘拐し売り渡すギャングが横行。衛生面でも、私は滞在中アメーバ赤痢で、3日に7kg痩せる酷い目にあった。飲み物食べ物悉く加熱を心がけたが、シャワーの湯までは煮沸できない。マラリアは世界中で二億人が感染、毎年2百万人が死んでいる。高額の生命保険をかけ出かけたが、無事に帰ってきたので、女房のやつガッカリしたかな？

（高原茂美）

ところが眞実は急速な拡散はないのであるから実に摩訶不思議である。

どうやら多くの現代人は便利な物に囲まれ過ぎていて眞実を見抜く視線が十分に養われていないのではないかと思ってしまう。

花粉症対策のマスクをした人達の往来をテレビ画像に見て、今の日本の状態に照らしてみると放射線防護のマスクのように見えてしまう、とても皮肉なコメントをしたのかもしれないが、それがブラックユーモアであることにしないで、実しやかな話になってしまつとすれば、矢張り現代人は世界中、眞実を見る視線を失っているとしか言いようがない。

こつした風評の伝播というのは、自責拒否の烏合の衆とでも定義してもいいのではないだろうか。何の風評でも、他力本願ではない人の集まりの中では起こらないだろうと思うのだが、どうなのだろうか。

実しやかと言えば、先月の風の会の定例会で、こんな話が出た。何処かの地で、女優さんだったか俳優さんだったか忘れたが、子供達に朗読を聞かせる活動をしているのだそうだ。そして、その人曰くには、「現代の子供達は本を読まないで、本を読む楽しさを知ってもらうために、感情を込めないで文章を知ってもらえる朗読をしている」というような事を言っていて、素晴らしいと思った、この意見を言われた。

小生、へそ曲がりなわけではないが、こつした間違つた話の時には頭ごなしにそれは間違い、という。当然、どこが間違いなのかはお話する。本を読まない子供達に、ニュースアナウンスをす

るように小説を読んで聞かせたとしても、子供たちが小説の面白さを知り、自分で読むようになることは絶対にないと言える。

感情のない読み手の声を聴いて、小説は素晴らしいなどと思う筈もない。

朗読を聞いて、小説の面白さに触れる事が出来るのは、朗読者が、その小説を借りて、そこに自分としての考えや思いを伝えることによって、聞いた子供達は、感動したり詰まらな思ったりという感想を持つことができるのである。

無感情に標準語のイントネーションで小説を読んでも聞かせても、小説の面白さを知らせるどころか、朗読という演劇表現への興味もなくなってしまう。

そつ話した女優だか俳優だかは、有名無名は別にして演出家について勉強をしたことのない人である。

小生の年代は、子供の頃にはラジオしかなく、子供向けのラジオドラマや落語、朗読などをよく聞いたものである。

所謂、声の演劇（ドラマ）を聞くことで、物語の面白さを知り、小説を楽しむことへと進んでいったのである。

朗読によって文章の物語の面白さへ進むためには、朗読そのものが面白くなければならないのである。朗読の小説が面白いのは、朗読者の心が小説を借りて表現されるから面白いのである。

ついでに作家として言わせてもらうと、もし朗読を演劇と捉え、そこに俳優としての思いを込められない人には、自分の物語を朗読する許可を出すことはない。さらに、小説は小説として読んでもらう以外の表現は、断るといふ作家も大勢いるのだ。

談笑室のコーナーだから、ついでに余談をさせてもらおう。

よく地方のアマチュア劇団などを見て、訛りのことを気になると言つ人がいる。だが、小生は訛りのことは一向に気にならない。訛りで気になるのは、大切な母国語訛りを無理やりに標準語に直さなければという、歪さが気になる。

標準語を正しい日本語だと理解している人が実に多い。しかし、茨木弁の方が正しいという意味では、正しい日本語である。勿論、ひとくくりにしてはいけませんが東北弁・関西弁・九州弁などの方が日本語としては正しいと言える。

つい先日のこと、震災の被災者を励ます会が何かで、宮沢賢治の「アメニモマケズ」の朗読をやっていたが、この詩を、昨年亡くなられた大先輩の長岡照子さんが朗読されたのを聞いたことがあったが、全くの東北弁での朗読を聞いたとき、宮沢賢治がこの言葉を声にした時の心が見えたような気分させられた。

これを標準語読みしても、宮沢賢治が心に浮かんだ言葉としての詩にはならない。

さて、今月は少し紙面に余裕があるので、ことは座の6月公演について少し、お話ししたいと思つ。ことは座の6月公演では、美浦村在住のモダンダンスの表現者柏木久美子さんと小林幸枝さんとの共演が実現する。

柏木さんと小林さんの初共演は、今年2月に行われた美浦村陸平遺跡の文化財センターで行われた「縄文の森コンサート」であつたが、その時の共演を見て、ぜひギター文化館で二人の舞を頭に置いた台本で演じてみたいと、柏木さんに頼み込ん

で実現することになったのである。

小林さんの舞は、言葉を動作の流れとして構築していく舞であり、柏木さんの舞は、言葉に内包された心の流れを容として構築していく舞である。「流海の舞」と題して、自然になかに、純粹に神との対話をしていた縄文の世界をイメージして、人が神から与えられた最大の恵みは「心を容にした言葉」をテーマに、大きなスケール感での演劇としての舞表現を構築していくと考えている。脚本の全てをここに紹介することは難しいので、テーマとなる詩の一部抜粋を紹介してみたいと思う。

【第二景】より「神の言葉」から…

… … …

民達よ。

心を容にするもの

それが言葉です。

民達よ。

言葉には容があり

そして姿があるのです。

言葉の姿は舞。

舞は人の語る言葉の姿なのです。

… … …

【第二景】より「恵みの詩」から…

… … …

人はさらさらと流れる言葉を聞いたとき
心もさらさらと流れだす。

人はうつうつと心揺れる言葉を聞くと
心もうつうつと揺れて何かを予感する。

だから言葉は音楽（うた）であり舞なのです

人の心の中に流れの音楽を忘れ舞を忘れると
憂いなく枯枝のようにカサカサと
そしてポキポキと折れてしまつたのです。

… … …

【第四景】より「言葉は心の容」から

… … …

詩は心の譜面です。

だから

詩を詠うとき心は自然に舞い

肉体は踊りはじめるのです。

詩は心の中に落ちていく自分の真実を
流れにする譜面です。

だから

詩は言葉に書くのではなく

声に詠うことで紡がれていくのです。

… … …

4月の20日くらいから本格的な稽古に入る予定
であるが、久しぶりにワクワクしている。

6月公演でもオカリナの野口さん、矢野さんの即興演奏をお願いする予定であるが、本当に楽しい舞台となるものと思っている。

今回の、柏木さんとの本格的な共演で、小林さんには一皮も二皮もむいてもらい、本当のスケール感というものを身に付けてもらいたいと願っている。

打田昇三さんの千枚に挑戦する特別企画「虚構と真実の谷間」の執筆も快調に進んでおり、完成が待ち望まれます。

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音(オカリナ)を

自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…

また大好きな雑木林に一掴みの土を

分けてもらい、自分の風の声を

「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。

オカリナの製作

オカリナ演奏に興味をお持ちの方、

連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

Tel0299-55-4411

《ふるさとの》

ビザ・バスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席
料理のお店ですギター文化館通り

看板娘(犬)「つらつ」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-55-60000

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

Tel 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

ことば座第20回公演「流海(うみ)の舞」

6月17日・18日・19日(午後3時開演)

第20回公演は、常世の国の恋物語百/第27話として、モダンダンスの**柏木久美子**さんを招き、**小林幸枝**との舞共演をお届けします。どうぞご期待ください。

私は静かに目を閉じ、残像の鎖をゆつくりと巻き上げて行った。

穏やかな光の隙間から聞こえてくる風の姿は、遙か遙か昔、神が森の暗闇に隠れて暮らす人間達に海に揺れて流れる光と波によつて紡がれる心の声の交わすことを教えてくれた日の姿であった。

その時、神は天から降りてきて森の民達にこう言った。

「民達よ。」

心を容にするもの

それが言葉です。

民達よ。

言葉には容があり

そして姿があるので。

言葉の姿は舞。

舞は人の語る言葉の姿なのです」

人はさらさらと流れる言葉を聞いたとき
心もさらさらと流れた。

人はうるうると心揺れる言葉を聞くと
心もうるうると揺れて何かを予感する。
だから言葉は音楽(うた)であり舞なのです。

(第一景・恵みの詩より)

ことば座 315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

あなたの隠れた才能をことば座に見つけてみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

- ◎募集要項
- 募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース
 - 募集人員：6名程度(最大10名まで)※面接及び朗読と簡単な表現試験有り
 - 養成期間：1年間(入塾は随時受付しています)
 - 指導月4～6回
 - 受講料：月額30,000円(全・半納割引有り)
 - ※詳しくは、ことば座事務局 0299-24-2063(担当:白井)までお問い合わせください。